

続・『土佐日記』誤写考：再び『貫之自筆本』本文を疑う

後藤，康文
北海道大学大学院：教授

<https://doi.org/10.15017/7325710>

出版情報：語文研究. 134, pp.16-25, 2022-12-09. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



続・『土佐日記』誤写考

—再び、貫之自筆本、本文を疑う—

後 藤 康 文

一 はじめに

以前、『土佐日記』冒頭部分に潜む三箇所^(金)の誤写について論じたことがあるが、本稿はいわばその続編で、今度は作品末尾部分に潜む三箇所の誤写について論じてみたい。そこでまずは、その三箇所を含む青谿書屋本の対象範囲を、そのままのかたちで掲出する。

いへにいたりてかとにゐるにつきあかけれはいとよくありさまみゆき、しよりもましていふかひなくそこほれやふれたる^(a)いへにあつたりつるひとのこゝろもあれはるなりけりなかゝきこそあれひとついへのやうなれはのそみてあつかれるなりさるはたよりことにもものもたへす

えさせたりこよひかゝることゝこわたかにもものいはせず^(b)いとはつらくみゆれとこゝろさしはせむとすきていけめいてくほまりみつゝけるところありほとりにまつもありきいつとせむとせのうちに千とせやすきにけむかたへはなくなりにけりいまおひたるそまされるおほかたのみなあれにたれはあはれとそひとゝいふおもひいてぬことなくおもひこひしきかうちにこのいへにてうまれしをむなこのもろともにかへらねはいかゝはかなしきふなひともしもなこたかりてのゝしるかゝるうちになほかなしきにたへすして^(c)ひそかにこゝろしれるひとゝいへりけるうたむまれしもかへらぬものをわかやとにこまつのあるをみるかゝなしとそいへるなほあかすやあらむまたかくなむみしひとのまつのちとせにみましかはとほ

くかなしきわかれせましやわすれかたくくちをしきこと
おほかれとえつくさすとまれかくまれとくやりてむ

(二〇四頁六行―一〇九頁一行)^(注2)

二 いへにあつけたりつるひとのこゝろも

はじめに、昔から議論のある傍線部①を取り上げる。ここに
関する近・現代諸注の見解は、左に列挙するとおりである
(傍線筆者)^(注3)。

・家をあげておいた人の心も／この「に」は難解である。
そのため、ときどき「を」に改めてある註釋書をも見か
けるが、主要寫本すべて「に」なので、貫之自筆本も同
じだったと思はれる。(中略)ここは「を」と代替できる
「に」の一用例として、いちおう解釋し、なほよく用例を
調べてはつきりさせたい。(『詳解』口譯／語釋)
・家に預けておいた人の心も、この家と同様に荒れている
のだったなあ。普通なら「いへをあげたりつるひとの
こゝろ」とすべきを、強欲で無責任な隣人に対する不満
から、主客を置きかえて、わざと家を主に、人を従に見
立てて「いへに」と諧謔にいったものか。

(『大系』頭注)

・家に預けておいた人の心も／家にあずけた人の心。家に
人の心を託したこと。逆説的な諧謔。

(『角川文庫』現代語訳／脚注)

・家だけでなくその上に、預けておいた人の心も／「いへ
に」が難解であるので、季吟『抄』・由豆流『考証』・景
樹『創見』・大秀『解』等の古註はすべて、「いへを」と
いう改竄本文に従って、解釈を容易にしているが、根幹
諸本四系統六本ともに「いへに」とあって、貫之自筆祖
本の本文が「いへに」であったことを証明しているから、
やはり、その本文の形に従って解釈を試みなければなら
ない。(中略)筆者は旧説を改めて、二月五日の条の「し
ぞきにしぞきて」や「いやふきに、いやたちに」の語釈
において言及したように、格助詞「に」に累加・添加の
作用のあることを認めた上で、このところの本文にも、
その語法が使用されていることを、最終的に主張するの
である。(中略)ゆえに、「いへにあげたりつるひとの
こゝろも」の格助詞「に」は、「サイダーにラムネ型」累
増の格助詞として、「荒れ果てたのは家だけでなく、その
上に」という意味であると解釈するのである(下略)。

(『全注釈』訳／釈)

・家に託してあった留守番の人の心も／(上略)家がどん

な状態になるか、留守番の心をそれに託してあったという皮肉な表現である。〔全集〕口語訳／頭注

- ・(家が荒れたばかりでなく)家に預けておいた隣人の心も／人の心の頼りなさから、家を主とした表現をしている。

〔旺文社文庫〕現代語訳／脚注

- ・家とはより(それを)預けておいた人の心も(同じく)／「家に」の「に」は格助詞。この助詞に累加・添加の作用のあるところから、こもその語法が使用されているという萩谷氏説にいちおう従う。(中略)旧注はことごとく「家に」という本文を「家を」に改めているが、原文にもっとも近い「青谿書屋本」も「家に」となっており、それに即応して、諸解釈が試みられるようになったのである。〔学術文庫〕現代語訳／注

- ・家もあずけた人の心も／家においても、預けておいた人の心においても、の意であろう。家も荒れているし、する人の心も荒れていた。(『譯注と評論』訳文／注解)
- ・普通ならば「人に預けたりつる家」というところを、わざと逆に「家に預けたりつる人の心」と述べて、貫之の家の管理を引き受けた隣人の無責任さに対する不満を皮肉に表現したと見る(『大系』など)。(『集成』頭注)
- ・家を預けた人の心も(『講談社文庫』現代語訳)

・家に預けておいた隣人の心も。「家を」ではない点に注意。家を主、人を従にした諧謔表現。(『新大系』脚注)

- ・(家を預けたつもりで実は逆に)家に預けた人の心も／本来なら「人にあづけたりつる家」とあるべきところを、「人の心」を中心に言う。人の心も月の光に明らかにな

たという趣向。

〔新編全集〕口語訳／頭注

- ・家ばかりではなく、この家を預けた人の心も

〔ビギナーズ』訳文)

- ・この家に預けておいた隣人の心も。皮肉な物言い。

〔新編』脚注)

のつけから冗長な羅列となったが、右のうち、今日もっとも支持されているのは、『大系』の校注者鈴木知太郎氏説で、同書はさらに、

- ・「いへに」は貫之自筆本にもそうであったにちがいない。したがって、「いへを」と改めて、それで解釈しようとする説は認めがたい。頭注のように解すれば、この「に」を、「人の耳におそり」のように、「を」と交用されたものと見る必要もあるまい。(中略) 事實は「人に家をあずけた」のであるが、ここは「人の心」を問題としているわけで、「こうひどく荒らしてしまったのでは、人に家をあずけたのか、家に人をあずけたのか、わかったもので

はない」といった気持を、諧謔に言いなしたものであるう。
(補注)

と述べている(傍線原文)。この「家を主とした表現」(『旺文社文庫』)説は、一見もつともらしいのだが、実際にはまったく成り立たつ余地がない。なぜならば、動詞「あづく」は自己の所有・管轄・監督・裁量下にあるものの権利や責任を、他者に委託・委任・委譲する場合にのみ用いられる語だからだ。『貫之』には何の権利も責任もない隣人の心を、勝手に自分の「家」に「あづく」と書く道理は、それがいくら文学的表現であつたとしても、もとよりないのである。

では、『学術文庫』や『ビギナーズ』が追従する『全注釈』説が正しいのかというと、無論そうではない。「に」=「サイダーにラムネ型」累増の格助詞「説の破綻は、同書がここと同じ用法として挙げる本作中の二例、

・ かくいひて、ながめつつ来るあひだに、ゆくりなく風吹きて、漕げども漕げども、後へ退きに退きて、ほとほとしうちはめつべし。

(二月五日条／四六頁一五行～四七頁二行)
・ かく奉れども、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風波のあやふければ (同／四七頁四行～六行)
のいずれもが、

・ 立て籠めたる所の戸、すなはちただあきにあきぬ。

・ せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。
(『竹取物語』／七三頁一行～二行)

『伊勢物語』第四十一段／一五〇頁三行)等々と同じく、前後に同じ動詞を重ねてその動作・状態の進行を表す、いわゆる強調の「に」にほかならない点(注)一つを取つてみても明らかはずだ。「累加・添加の作用」(『全注釈』)は、「人の心」に接続する係助詞「も」がひとえに担っているのであつて、問題の格助詞「に」にそのような機能を認定することはできない。

となれば、「ことごとく「家」という本文を「家を」に改めている」(『学術文庫』)旧注の判断こそが、結局のところ唯一無二の正解ということになりはしないだろうか。字母で示せば「乎」↓「耳」の誤写が想定可能で、本節の問題本文はただちに、

◎家をあげたりつる人の心も
に改訂する必要があるといえよう。あたりまえの話だが、自己所有の「家」であるからこそ、その管理を他者に委託できたのである。

三 いとはつらくみゆれと

つぎに、傍線部⑥「いとはつらくみゆれと」である。諸注「いとはつらく見ゆれど」と読み、以下のように解釈している(傍線筆者)。

- ・ 實にひどい態度だとは思はれるが (『評解』口譯)
- ・ とてもひどいとは思われますけれど

『角川文庫』現代語訳

- ・ 全くもって薄情だとは思われるが (『全注釈』訳)
- ・ 実にどうも薄情だとは思われるけれど／「いと」に係助詞の「は」が付いた形。 (『全集』口語訳／頭注)

- ・ とてもくやしく思われますが (『旺文社文庫』現代語訳)
- ・ まったくひどいと思えますが (『学術文庫』現代語訳)
- ・ 実にひどいとは思って見ますけれど

『譯注と評論』訳文

- ・ まことにひどいとは思ったけれども (『集成』傍注)
- ・ 大そう残念には思いますけれど

『講談社文庫』現代語訳

- ・ とても薄情だとは見えるけれども (『新編全集』口語訳)
- ・ まったく薄情だとは思いますが (『ビギナーズ』訳文)

右のうち、『評解』『角川文庫』『全注釈』『全集』『譯注と評論』『集成』『講談社文庫』『新編全集』『ビギナーズ』の訳は「いとつらくは見ゆれど」の本文に、また、『旺文社文庫』『学術文庫』のそれは「いとつらく見ゆれど」の本文に対応するもので、いずれも不可。そしてこの結果は、「いとはつらく見ゆれど」がそもそも正しく訳せない本文であることを如実に物語っている。

そこで、次のような非論理的現本文擁護論が飛び出すことになるわけだが、その無効性は自明というほかない。

・ 「いと・つらく・は」の係助詞「は」を転位させたのではなく、むしろ「いと・は・つらく・は」と、係助詞「は」を二度用いるべきところを一つ省いたと考えるべきであろう。相手を薄情だと感じる度合いが、いかに強いのか、その度合いの強さを強調するために、係助詞「は」を副詞「いと」につけたのである。「いと・つらく・は」とすると、「いと」の働きが平凡になってしまうからであろう。「いづみのくにまでとたひらかに願たつ」(正月廿日条)「いたれりしくにてぞこめるものどもありあへる」(二月九日条)の場合と同じ破格である。

この奇矯な説は、「係助詞「は」を二度用いるべきところ」(『全注釈』釈)

という前提からしてすでに理解しがたいものであり、つづく「相手を薄情だと感じる度合いが、いかに強いのか、その度合いの強さを強調するために、係助詞「は」を副詞「いと」につけた」との推定に至っては、もはや滑稽ですらある。副詞「いと」の意味を強めるのであれば、

・男もならはぬは、いとも心細し。まして女は、船底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。

〔土佐日記〕正月九日条／二六頁九行～一〇行
・曇れる雲なくなりて、^{あかつくくよ}暁月夜、いともおもしろければ、船を出だして漕ぎ行く。

（同正月十七日条／三一頁五行～七行）
などの作中例に同じく、下接する係助詞は「も」になるはずであつて、「は」が接続することはまずありえない。

だから、だからそうではないのだ。そうではなく、「いと」は辛く見ゆれど」は「いと辛くは見ゆれど」とありたいところ」（『学術文庫』とみるのが、この場合正常な感覚であることとはいうまでもなからう。すなわち、本節の問題本文⑥は、

・女御の君の御手の、あてに若くは見ゆれど、大人しくも後見おこするかな、と思して

（『うつほ物語』蔵開中巻／②——四五七頁三行～四行）
・大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれ

ど、心にもつかずおぼえたまひて

（『源氏物語』桐壺巻／①——四九頁五行～六行）
などと同型の、

◎いとつらくは見ゆれど

へと、即刻改訂されねばならないのである。

ちなみに、『全注釈』の挙げる他の二例についても、これとまったく同じ措置を施す、すなわち助詞の位置を移す必要があり、十二月二十二日条の、

・いつみのくにまでとたひらかに願立つ

（二八頁六行～七行）

は、

◎「和泉の国まで平らかに」と願立つ。

に、二月九日条の、

・いたれりしくにてそ子うめるものともありあへる

（九六頁九行～九七頁一行）

は、

◎いたれりし国にて子産める者どもぞありあへる。

に、それぞれ改められるべきなのである。^{（注）}

四 ひそかにこゝろしれるひとゝいへりけるうた

さて最後は、傍線部③の「ひそかにこゝろしれるひとゝいへりけるうた」という箇所、直後に「貫之」の歌「生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るがかなしさ」がつづく。そして、従来の解釈はこうだ（傍線筆者）。

・ ひそかに氣心が知れてゐる人といひあつたとかいふ歌

（『評解』口譯）

・ こっそり、この悲しみの氣持を理解している人と詠みました歌は

（『角川文庫』現代語訳）

・ お互いに氣持のわかつている人とそと詠み交わした歌というのがね

（『全注釈』訳）

・ こっそり氣持のわかつている人とよみかわした歌は

（『全集』口語訳）

・ この氣持を知ってくれる人とこっそり詠みかわした歌は

（『旺文社文庫』現代語訳）

・ こっそりと、おたがいの（悲しい）心を察し合っている人と詠み合った歌

（『学術文庫』現代語訳）

・ 氣持がわかつている人とひそかに言いました歌は

（『譯注と評論』訳文）

・ ひそかに、自分の氣持をよく知ってくれている人と語り合つて作った歌は

（『講談社文庫』現代語訳）

・ 氣持をわかつてくれる人と詠み交わした歌。

（『新大系』脚注）

・ ひそかにこの心をわかり合う人と言ひ合つた歌は

（『新編全集』口語訳）

・ お互い心が通じ合っている人とそと詠み交わした歌は

（『ビギナーズ』訳文）

・ 氣持を理解できる人と言ひ交した歌。

（『新編』脚注）

見てわかるように、多くが「詠み交わす」ないしそれに準ずる訳語を充てている（『全注釈』『全集』『旺文社文庫』『学術文庫』『新大系』『新編全集』）。しかし、動詞「いふ」が、

歌を「詠む」のみならず、「交わす」の意まで表すとは、どうあつても考えがたい。かりにそうであるなら、

・ 和歌、主も、客人も、こと人もいひあへりけり。

（『土佐日記』十二月二十六日条／一六頁一五行／一七頁一行）

一行）

・ 「今日はみやこのみぞ思ひやらるる」「小家の門のしりくべ縄の鯔の頭、柊ら、いかにぞ」とぞいひあへなる。

（同元日条／二〇頁一四行／二二頁一行）

のごとく、別の動詞「いひあふ」を用い、「いひあへりけるう

た」と表記されるはずではないのか。作中二度既出のこのことばが、何ゆえここでは使用されなかったのだろうか。また、「貫之」と「心知れる人」とが和歌を「詠み交わした」のであれば、当然相手の歌もあったはずだが、いったいいかなる理由でそれが省かれたのだろうか。と、両々相俟つて不可解のうえない。

「いへりける歌」は、この場合「声に出して詠んだ歌」「口頭で伝えた歌」の意にしか解けないはずである。にもかかわらず、従来「詠み交わした歌」などと誤訳されてきた原因は、直前の格助詞「と」にある。「と」を書かれている以上、傍線部①本文は、「心知れる人」と、一緒に「生まれしも」以下二首を合唱したとしか解せなくなるため、そこにどうしても歪みが生じてしまうのだ。

多くの注釈書は、この問題に対して深入りすることを避け、曖昧に対処せざるをえなかったというのが事の真相のようで、いつもは饒舌で委曲を尽すはずの『全注釈』が、珍しく沈黙しているのも象徴的といえよう。そこで下手に、否、誠実に「説明責任」を果たそうとすれば、

・貫之の悲しい心中を理解できる人とともに詠んだ歌、の意。貫之の妻を指すとも考えられるが、やはりその共感者は貫之自身の分身というべきで、こうした形で『土佐

日記』の対自的構造の到達点を示す。その内話的世界が、これまでにないほどの、しんみりとした哀感をもたらす。

（『集成』頭注）

・隣人への憤慨は一行全員で共有できる感情であつたが、亡児のこととなると、筆者と「心知れる人」と二人だけのひそやかな悲しみになる。「心知れる人」は通説では作者の妻に擬せられるが、これも作者の分身の一と云うべきか。作者は自己心内の相手と語らう。

（『新編全集』頭注）

というような病的解釈にたどり着いてしまうのだから。旅路の果てに襲われた大いなる喪失感、如何ともしがたい虚無感に押し潰されて、「貫之」は肉体のみならず、精神までもが蝕まれてしまったというのだろうか。

もちろん、そうではない。実は、至極単純な話だったのだ。すなわち、「ひと、」の「、」（または「と（止）」は「（二）」の誤写だと考えて、本文を、

◎心知れる人にいへりける歌

に改めてやりさえすればよかったのである。「人物+にいふ+歌」の形式は、『伊勢物語』を例にとるならば、

・むかし、男、つれなかりける女にいひやりける。

ゆきやらぬ夢路を頼むたもとは天つ空なる露や置

くらむ (第五十四段／一五九頁三行～五行)

・むかし、男、狩かりの使つかひよりかへり来けるに、大淀おほよどのわたりに宿りて、齋いづの宮みやのわらはべにひかけける。

みるめ刈るかたやいづこそ棹さぐささしてわれに教へよあまのつり船 (第七十段／一七五頁三行～六行)

・むかし、男、すずろに陸奥みちの国までまどひいにけり。京に思ふ人おもふひとにいひやる。

浪間なみまより見ゆる小島のはまびさし久しくなりぬ君きみに

あひ見で (第百十六段／二二二頁八行～一一行)

のごとくで、何の問題もないありふれた表現となる。『貫之』は、同じ悲しみに浸る妻に対してひっそりと和歌を詠みかけ、傷癒えぬ老残の魂を慰撫したのである。

五 おわりに

青谿書屋本『土佐日記』中の不審本文は、まだところどころにある。前稿で扱った十二月二十二日条を例にとるなら、「廿二日に」(一八頁六行)の「に(爾)」は、上の漢字「日」との字形相似に起因する衍字と判断されるし、「かみなかしもゑひあ(安)きて」(一九頁一行)は、他本にあるとおり「ゑひす(数)きて」の誤りとみるべきだろう。^(注6)

本稿で対象とした範囲内においても、「かとにいるに」(一〇四頁六行～七行)は「かとより、いるに」逆に「き、しよりもまして」(二〇四頁八行～一〇五頁一行)は「き、しにもまして」とあるべきではないのかなど、なお疑えば疑える箇所がないでもないが、過度の穿鑿は禁物と心得、今回はこまめとする。

注

注1 拙稿『土佐日記』誤写考——『貫之自筆本』本文を疑う——

(久保朝孝編『危機下の中古文学二〇二〇』武蔵野書院、令三・三所収)

注2 本稿における『土佐日記』(青谿書屋本)本文の引用は、萩谷

朴編『影印本 土佐日記(新訂版)』(新典社、昭四三)に、また、本作品を含む用例の掲出に際しては、便宜『新編日本古典文学全集』に依拠し、その頁数・行数を表示した。

注3 本稿で引用する『土佐日記』の注釈書とその略称は以下のとおりである。小西甚一『土佐日記評解』(有精堂、昭二六)↓『評

解』、鈴木知太郎担当『日本古典文学大系 土佐日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』(岩波書店、昭三三)↓『大系』、三谷榮一『角川文庫 土佐日記』(角川書店、昭三五)↓『角川文庫』、萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店、昭四二)↓『全注釈』、松村誠一担当『日本古典文学全集 土佐日記蜻蛉日記』(小学館、昭四八)↓『全集』、村瀬敏夫『旺文社文庫 現代語訳对照 土佐日記』(旺文社、昭五六)↓『旺文社文庫』、品川和子『講談社学術文庫 土佐日記全訳注』(講談社、昭五八)↓『学

術文庫』、今井卓爾『土佐日記 譯注と評論』（早稲田大学出版部、昭六一）↓『譯注と評論』、木村正中『新潮日本古典集成 土佐日記 貫之集』（新潮社、昭六三）↓『集成』、川瀬一馬『講談社文庫 土佐日記』（講談社、平一）↓『講談社文庫』、長谷川政春担当『新日本古典文学大系 土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』（岩波書店、平一）↓『新大系』、菊地靖彦担当『新編日本古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』（小学館、平七）↓『新編全集』、西山秀人『角川文庫 ビギナーズ・クラシック 日本古典 土佐日記（全）』（角川書店、平一九）↓『ビギナーズ』、東原伸明・ローレン・ウォーラー『新編 土佐日記 増補版』（武蔵野書院、令二）↓『新編』。

注 4

念のため説明しておくならば、後者は「いや吹きに（吹き、いや立ちに（立ち）」の省略形ないし短縮形である。

注 5

前者については、注1拙稿ですでに指摘した。

注 6

なお付言すれば、十二月二十一日条「かれこれしるしらぬおくりす」（二八頁一行～二行）の「か（可）れこ（己）れ」についても、白石勉「土佐日記創見」（『国語解釈』第一卷第三号、昭和一一・四）の説くとおり、「こ（己）れか（可）れ」が本来の形とみられる。

（こと） やすふみ・北海道大学大学院教授